

# 「地域で子育て」を考えるために

— 別府市における子育て支援活動の現状と課題 —

別府大学文学部人間関係学科

瀬戸口 昌也

## I 「育児の孤立化」から「育児の社会化」へ

「子どもがかわいくない」、「どうやって育てたらよいのか、わからない。」など、子育てについて母親が一人で悩む「育児不安」や「育児の孤立化」が、現在問題となっている。育児不安が起こる理由は複雑であり、歴史的・社会的・心理学的分析を必要とするが、この問題は家庭教育の問題として、行政側にもその対応策を迫るようになっている。その象徴的とも言える例は、今回の社会教育法の一部改正<sup>\*1</sup>であろう。社会教育の課題として、「家庭教育に関する学習機会の充実と奨励」を条文の中に新たに加えたことは、現在の家庭教育の問題の深刻さを表すとともに、家庭教育に対して、行政がより積極的な支援策を行わなければならないことの意味している。

近年の行政による子育て支援策の基本は、平成7年度から11年度にかけて実施されたいわゆる「エンゼルプラン」にまで遡ることができる。この政策プランは、深刻化する少子化現象<sup>\*2</sup>への対応策として策定されたもので、当時の厚生・文部・労働・建設省の合意の下で策定され、実施された点に特徴がある。つまり今後の行政が行う子育て支援は、これまでのように関係省庁や関係部局がそれぞれ独自に展開するのではなく、各省庁や部局が相互に連携しあいながら、総合的な観点の下で機能的に展開されなければならないことを強く印象づけたのである。その後エンゼルプランを受けて、少子化対策のさらなる重点政策として、「新エンゼルプラン」が平成11年12月に策定され、現在に至っている。国のこのような子育て支援政策を受けて、各地方自治体は、それぞれが独自の子育て支援策を計画・実施している。例えば大分県では現在、「おおいたこども育成プラン21」を平成16年度までの計画で実施中であるし、別府市

では別府独自のエンゼルプランとも言える「べっぷ・みんなで子育て支援計画」を現在策定中である。

このように、国や地方自治体による子育て支援策は、少子化対策を中心として近年ようやく具体的に展開されつつある。子育ての問題は、もはや母親個人や個々の家庭の中での問題としてだけではなく、家庭教育に強い影響力を持ってきた学校教育や、行政主体による社会教育との関連で捉えなければならない。言い換えれば、家庭と学校を含む地域社会全体で子育てを考えていくことが、必要である。そこでは母親の「育児の孤立化」に対して、地域全体で子育てを考えていく「育児の社会化」が求められているのである。

## II 別府市の子育て支援の現状

それでは別府市の子育て支援は、現在どのような状況にあるのだろうか。別府市においても、近年子育て支援活動が、さまざまな形で進行中である。報告者が把握できた範囲で、最近の主立った事業や活動を挙げてみると、以下のようなものが挙げられる。

・別府市子育て支援センター「どれみ」

平成13年7月から別府市が新しくスタートした事業で、子育てについての相談事業(電話・面接)、子育て支援活動(子育てサークルの育成・支援、本の無料貸し出し)、子育てについての情報提供・広報活動(インターネットや広報誌)などを行っている。

\*1 平成13年7月文部科学省通知「社会教育法の一部を改正する法律について」

\*2 一人の女性が生涯において産む子どもの数を示す合計特殊出生率は、減少傾向にあり、2000年現在で1.35を記録した。



1. 父親の育児参加の問題。
2. 子育てに役立つ情報提供のあり方の問題。
3. 子育て支援や育児サークル等に、積極的に参加できない母親に対するサポートの問題。

1については、母親の立場から「育児の大変さを父親は認めてほしい。」「家事を手伝ってもらいよりも、育児の大変さに対する理解やねぎらいの言葉がほしい」等の意見が出された。これに対して、父親の側からは例えば「絵本の読み聞かせ」など、「自分のできる範囲」での実践例も紹介された。

2については、子育て支援活動や育児情報が、利用者に対して必ずしも十分に伝わっていない現状が明らかになった。母親は育児情報を主に、地域の新聞や児童館、母親サークル、保健婦などから得ており、限られた情報ルートの中では、転勤等で新しく別府に来た母親には育児情報は得られにくいという体験談も寄せられた。

3については、残念ながら時間の関係で十分に議論することができなかった。



写真2 座談会「地域で子育てを考えよう」

の育児参加のあり方の一つとして注目されている。その成立や活動内容はさまざまであるが、このような会のモットーは、例えば「無理せず」「力まず」「がんばらず」であり、母親サークルとはまた違った存在感を持っている。別府においても、このような会の発生と育成が望めないものだろうか。母親の育児サークルとはまた違った支援のあり方が、あってもよいように思う。

2の子育てについての情報提供のあり方の問題は、いくつかの問題点が絡まり合っている。まず座談会でも指摘されたことだが、基本的な問題として、現在行われている子育て支援が、利用者には有益な情報を与えるに足るだけの十分な活動をしているのかということが問題となる。さらにこの問題に関連して、このような活動が、利用者のニーズを正しく把握して、それを活動に反映させているのかが問題となる。そして最後に、このような活動状況が利用者には確実に伝わるための情報ルートが、確立されているのかが問題となる。これらの問題は全体として、子育てについての情報ネットワークの整備確立の問題として捉えることができる。

3の育児支援やサークル活動に消極的な母親へのサポートの問題は、深刻で重大な問題である。育児不安を抱えてしまう母親は、このような母親に多い。座談会で「育児ノイローゼ状態にあるときは、自分ではそれに気がつかない」という母親の体験談があったが、このような状態にある時こそ、他者の助けが必要であろう。また、ノイローゼ状態になくても、サークル活動や子育て支援活動に参加したくても、躊躇してしまう母親も多い。これらの活動は主として集団活動であり、対人関

## IV 別府における子育て支援の課題

今回の座談会は限られた時間ではあったが、別府で直接子育てにかかわっている方たちの率直な意見を聞くことができ、大変参考になるものであった。座談会の内容を検討した上で、別府における子育ての今後の課題を考えてみよう。

1の父親の育児参加の問題は、家庭教育の問題ばかりでなく、ジェンダーや「男女共同参画社会」実現の問題とも関連して、最近特に強調されてきている。しかしこの問題の解決は、結局男性である父親の意識改革に委ねられている。また、そこで求められている育児参加の形態も、家庭によってさまざまであることが考えられる。男性の立場から言えば、育児参加を無理強いしないで、育児について考え、話し合えるような場と雰囲気が必要であるように思われる。このような場は、家庭の中で自然に発生してくるべきものなので、第三者がその必要性を強調することはできても、それを家庭の中に意図的に作り出すことには限界がある。それでは家庭の外であれば、どうだろうか。最近全国で増えてきた、育児を中心とした父親たちの交流の場（いわゆる「親父の会」）は、男性

係の不安や人間関係の煩わしさを避ける傾向があるものと思われる。このような問題の解決は、結局母親一人ひとりが育児を通して、どれだけ良好な人間関係を築くことができるかにかかっている。そのためにはまず、母親たちが子どもを連れて自由に交流できるような場と時間が必要であろう。もちろん、これまで各支援活動がそのような機会を提供してきたわけだが、これらは場所も時間も限られている上に、主催者も参加者もどうしても目的意識が強くなってしまふ。育児に疲れた母親が自由な時間に子どもを連れてやってきて、思い思いに好きなことをしてくつろげる一定の空間（「たまり場」や「サロン」）が必要であるように思われる。このような母親のためのフリースペースの必要性は、最近注目されており、自治体や民間においても設置するところが増えてきている\*3。このようなフリースペースが、規模は小さくても地域の中に複数あることが理想であろう。

## 子育てネットワークの必要性

以上のことを踏まえて、もう一度最初の問いを考えてみたい。現在別府において、さまざまな形で行われている子育て支援は、母親の育児不安や育児の孤立化の解消に役立っているだろうか。関係者や利用者の声を聞けば、それぞれの活動は、確かに一定の成果を上げているように思われる。しかし育児不安の原因は各人によって複雑であり、それを減らすことはできても、無くすことはできない。母親は常に育児に何らかのストレスをかかえているのである。そのような母親に対して、育児についての要望を聞き、それに的確に対応しているという姿勢をまず示すことが重要であろう。しかしこのことを可能にするようなシステム、すなわち利用者のニーズを聞いて、それに対する見解や対応を伝えるような情報システムは、まだ不十分な段階にあるのが現状である。それぞれの

支援活動は、現在インターネット等で情報収集と広報につとめてはいるが、これらの情報は単独で一方向的に伝えられ、十分に活用されているとは言えない。情報が効果的に確実に利用者のもとに届き、かつ利用者の意見をも聞けるような双方向的な情報システムや、各事業間で情報をやりとりできるような情報ネットワークが必要である。

このような情報ネットワークに加えて、子育てに関係しているすべての人が、直接にかかわっていけるような人的ネットワークも作っていく必要がある。現在別府で行われているさまざまな子育て支援の関係者やその利用者が、直接会って交流し、意見を交換できるような場はない。関係者は関係者同士で、利用者は利用者同士で、さらにその中でも親しい者同士で固まってしまうと、地域で子育てといっても形だけのものになってしまうだろう。

このような子育てのための情報ネットワークと人的ネットワークの整備、一般的に言えば子育てネットワークの形成が、今後別府の子育て支援において必要になってくるものと思われる。この点で、大分県の宇佐市と中津市ですでに運営されている子育てネットワークは、参考になる。宇佐の場合、母親たちが中心となって子育てのための情報誌を2ヶ月に1回の割合で定期的に発行している。この情報誌は地域の子育てについての情報を網羅しており、情報の活用度も高く、2500部を発行し、毎回保育所や幼稚園などに配布しているという（写真3）。このような市民の手による自主的な活動を、行政がサポートする形で運営されている。また中津の場合は、行政が中津とその周辺にある地域でネットワークをつくり、毎年子育てについてのフォーラムなどさまざまなイベントを開催している。育児サークル同士の交流会も行われ、行政と市民が一体となって子育てしやすい地域を作っていくためのプログラムは、参考になる。

子育てネットワークは、子育てしやすい地域をつくっていくために今後確実に必要になってくるものである。その実現には、多くの課題や問題点が予想される。瀬沼克彰は、生涯学習社会におけるネットワークづくりのために必要なことは、従来の縦割りの生涯教育事業を横断的に結びつけることであるとしている\*4。その際の視点として挙げるのが、「施設・資源・事業・情報・人材」

\*3 例えは武蔵野市が運営する子育て支援センター「0123 吉祥寺」、東京都江東区の「子ども家庭支援センター」、北九州市の「乳幼児子育てネットワーク・ひまわり」など。

\*4 瀬沼克彰『日本型生涯学習の特徴と振興策』、学文社、2001年。

各欄に参加・見学される方は、日程等の変更がありますので必ず欄に問い合わせをして下さい。

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3 〔保健所〕 3歳6ヶ月児健診 スーパードラッグ ウエダ 宇佐店 赤ちゃん相談会 12:00~15:00	4 〔宇佐公民館〕 子育て教室 10:00~11:30	5 〔田園館〕 ラポ無料体験 16:30~17:15 TEL:33-0841	6 〔六分湖児童センター〕 ふれあい広場 10:00~14:30
7 宇佐市内小学校 入運動会 (一部を除く)	8 体育の日	9	10 〔保健所〕 1歳6ヶ月児健診 スーパードラッグ ウエダ 真田店 赤ちゃん相談会 12:00~15:00	11	12 〔田園館〕 ラポ無料体験 16:30~17:15 TEL:33-0841	13
14	15	16	17 〔保健所〕 4ヶ月児健診 乳幼児教室	18 〔なごさ幼稚園〕 第24回 なごさびっこ広場	19	20 〔なごさ幼稚園〕 バザー 14:00~
21	22	23	24 〔保健所〕 10ヶ月児健診 産科フロンティア教室	25	26	27
28	29	30	31	(メモ)		

※( )内は健診や行事が行われる場所です。保健所での健診及び集団予防接種については13:30~14:00受付

各欄に参加・見学される方は、日程等の変更がありますので必ず欄に問い合わせをして下さい。

日	月	火	水	木	金	土
(メモ)						
4	5	6 〔西日市児童館〕 親子工作教室	7 〔保健所〕 3歳6ヶ月児健診	8 〔宇佐公民館〕 親と子の ふれあい広場 10:00~	9 〔田園館〕 ラポ無料体験 16:30~17:15 TEL:33-0841	10 宇佐市 ふるさとまつり ことさ幼稚園 文化祭 10:00~13:00 バザー 11:00~
11 宇佐市 ふるさとまつり	12	13	14 〔保健所〕 1歳6ヶ月児健診	15 七五三	16 〔田園館〕 ラポ無料体験 16:30~17:15 TEL:33-0841	17 〔高家保育園〕 ゆあひコンサート 10:00~
18 〔西日市児童館〕 文化祭	19	20	21 〔保健所〕 4ヶ月児健診 乳幼児教室 〔西日市児童館〕 カワイ体育教室 無料体験 9:30~	22	23 〔八幡小学校〕 文化祭	24
25	26	27	28 〔保健所〕 10ヶ月児健診 産科フロンティア教室	29	30	

※( )内は健診や行事が行われる場所です。保健所での健診及び集団予防接種については13:30~14:00受付

写真3 宇佐子育てネットワーク協議会発行「ひまわり」の一部

の5つである。この5つの視点は、子育てネットワークを形成していく際にも同様に重要な視点となる。現在別府で行われているさまざまな子育て支援は、それぞれがばらばらで単独に行われるべきでなく、人材や情報も含めたこれら5つの視点で連携していかなければならないだろう。そして瀬沼自身は述べてはいないが、これらの視点でそ

れぞれの事業が連携をとっていくためには、その推進役となる独立したネットワーク推進センターのようなものが必要となるように思われる。そしてこの推進センターとしての役割が、現在の「地域に根ざした大学」に求められているのではないだろうか。

本文で触れた子育てセンターのホームページアドレスです。

- どれみホームページ <http://www.ctb.ne.jp/%7Edoremi/>
- 豊湯ねっと子どもセンター <http://www.ctb.ne.jp/~hoyu/>
- ビューティフル・スマイル・センター <http://www.coara.or.jp/~smile99/>
- 0123吉祥寺 [http://www.parkcity.ne.jp/~m0123hap/kitijyouzi/k\\_index.htm](http://www.parkcity.ne.jp/~m0123hap/kitijyouzi/k_index.htm)
- 乳幼児子育てネットワークひまわり <http://www.lbe.co.jp/~himawari/>